

池に棲むあやかしの怪

明治あやかし新聞 怠惰な記者の裏稼業

さとみ桜

「今日は蕪のいいのが入ってるよ」

明治九年の年の瀬も迫るその日、襟巻きに顎を埋めて買い物に出かけた香澄は、青物屋の店主に声をかけられて足を止めた。店先には籠に盛られた蕪や冬瓜、ひよろりと細長い大根が並んでいる。

「香澄ちゃんはお得意様だから、安くしとくよ」

「それなら買っちゃおうかな」

野菜は買う予定ではなかったが、安くすると言われればつい財布の紐が緩んでしまう。蕪なら漬け物にしても美味いだろうし。

物心つく前に母を亡くした香澄は、幼い頃からかれこれ十数年、手伝いの女性に習って父と兄の食事の用意を続けているのだ。

店主が丸い蕪を持ちあげた。

「今が買いだよ。この蕪を作ってるのは俺の産まれた村なんだが、幼馴染の留吉が、この先も同じように作り続けられるか分からないって嘆いてやがったからな」

取れたてなのだろう瑞々しく美味しそうな蕪を見ていた香澄は、彼の言葉に問いかける。「何かあったんですか？」

幼馴染の留吉さんとやらが病や怪我で畑仕事ができなくなってしまうのだろうかと思つて問えば、彼は溜息をつきつつ腕を組んだ。「なんでもなあ、地主様の夢にお告げがあったらしいんだよ。『村の溜め池に悪い妖怪が棲んでいる』とか。それで溜め池を埋めることになつたらしい」

「……お告げ、ですか」

何やら思いがけない言葉に、香澄は目をまたたいた。夢のお告げなどという不確かな理由で溜め池を埋められたら、その池の水を日頃使っている人たちは困ってしまうのではないだろうか。例えば本当に『溜め池に棲んでいる』という悪い妖怪が悪さをしているのなら別だが。

「それは、困っちゃいますね」

「そうだろ？ 溜め池を埋められたら畑にまく水を運ぶのが大変になっちまうから、これまでと同じように野菜を作れねえって、村の奴らは反対してるみたいだが、その地主様ってのも頑固らしくてね、『お告げだ』『お告げだ』って話にもならんそうだよ」

「新しく溜め池を作らないんでしょか」

「そっちの溜め池に悪いものが住み処を変えたら同じだって、それも決つてるそうさ。まあ、害虫で有名な人らしいからな、どこまで本心なのやら」

「害虫とは金にうるさい人——つまりケチのことだ。」

もう一度大きく溜息をついた店主は、けれどにやりと笑つて蕪を香澄に差し出した。

「つてなわけで、今が買いつてことだ」

商魂たくましい彼に香澄は笑い、蕪の隣の籠を指さす。

「じゃあ、その蕪と冬瓜もくださいな」

そこには焦げ茶色の三つ揃えの洋装に身を包んだ青年が、顔の上に帽子を置いて、長椅子にだらしなく寝そべっている。

「久馬さん、また忘れてるんですか？」

「休憩だ、休憩」

顔の上の帽子を退けもせず、久馬はひらひらと手をふった。この内藤久馬、日陽新聞社の記者でありながら、勤務時間の半分はサロンで昼寝をしている怠け者なのだ。

すると彼の向かいの椅子に座っている男が、煙管の煙を吐いてくすりと笑つた。

「おはようございます、香澄さん。久馬さんは睡魔に取り憑かれていますので、もう二度と目覚めませんよ」

長い黒髪を緩く結つた彼は、色気のある細い切れ長の目と鬚髯の染め抜かれた黒い着流し姿で、妖しい雰囲気をもしだしている。

彼は久馬の友人——いや、久馬に言わせると腐れ縁の芝浦艶煙。妖怪話ばかり演じる小さな芝居小屋の役者である。

「はいよ。毎度あり」

買った野菜を抱えた香澄は、お告げのことを考えながら帰路についた。

明治と呼ばれる時代となつて九年が経つても、女が男の職場で働くことなど滅多にあることではなかった。しかし、ひよんなことから香澄は銀座にある日陽新聞社で働いている。多くの仕事は掃除や手紙の仕分けといった雑用であるが、字の巧さを買われて書き物の清書を任されることもあった。

溜め池の話聞いた翌日。新聞社へ出社した香澄は、編集室に見つからなかった目当ての人を探して一階のサロンへ向かった。娯楽記事を中心に掲載する日陽新聞社のサロンは、仕事を求める絵師や講演予定を持ち込む役者などの溜まり場になっている。その隅に探している男を見つけて、香澄は歩み寄つた。

香澄は彼の冗談に首をかしげて問いかける。

「それってほぼ死んじやつてませんか？」

「勝手に殺すな」

久馬が帽子を持ちあげて、億劫そうに身を起こした。二十代後半の端整な顔立ちが現れる。長めの前髪を掻きあげて、彼は欠伸を噛み殺した。

「どうした？ 掃除か？」

「いいえ。ちよつと聞いて欲しいことがあつて」

香澄は久馬の向かい、艶煙の隣に腰を下ろすと、昨日青物屋で聞いた話を、かいつまんで二人に伝えた。

「お告げ？」

不可思議そうな表情を浮かべた久馬に香澄は頷く。

「そうなんです。妖怪がいるって思っている人はいるとは思いますが、でも害がないうちから村の人が困るのに溜め池を埋めるなんて、どう思いますか？ 埋める前にお坊さんとか神主さんにお祓いしてもらえばいいのについて思いませんか？」

「お告げを信じ切って、村人に害があつてはいけないと思ひ込んでいるのかもしれないけどな」

「でも、そんなに村の人を案じてるなら、なんとかして新しい溜め池を作ってくれた方がいいじゃないですか。地主さんだって、自分の土地でお野菜が作れなくなったら困るでしょう？」

「それはそうですね」

香澄の意見に艶煙が同意した。久馬が眉を寄せる。

「どうしても溜め池を埋めたい理由があるんじゃないのか？ だが客虫だから、出費を惜しんで新しい池は作らない。まずはお祓いで

「神や妖怪を利用するとはけしからん」

そう言って再び長椅子へ横になった久馬と艶煙を、香澄は思わず半眼で見やっした。

「久馬さんも艶煙さんも、もの凄く利用しますよね？」

彼らは実は、困っている人から相談を受けては、妖怪の存在を利用してお悩み解決の手助けをしているのだ。新聞記者の久馬は妖怪の記事を書くことができ、妖怪好きの艶煙は、妖怪の存在を世に広めることができる。つまり、一石二鳥であるらしい。

無関心な久馬にむうと唇を尖らせた香澄をなだめるように、艶煙が手をふって立ち上がった。

「それではちよっと、あたしがその地主さんを調べに行ってくださいようかね」

彼の言葉に久馬は帽子を顔に載せながら「頼む」と短く応じた。

どうやら久馬も、まったく興味がないわけではないようだった。

もして、それでも駄目——実際に何かが起こって埋めるなら、村の人も納得するだろうにな」

艶煙が意味ありげに含み笑いた。

「村の人を案じているように見せかけて、反対を押し切ってまで大事な溜め池を埋めようなんて、変な話ですねえ」

「怪しいな、地主が」

まだ眠そうに小さく欠伸をしている久馬に香澄は問いかける。

「溜め池に何か秘密があるんでしょうか？」

「さあな」

久馬はあまり興味がなさそうだった。だが、妖怪話が好きな艶煙はそうでもない様子で話し続ける。

「妖怪を、池を埋める理由にしようとしているのかもしれないねえ？」



その村に珍しく客がやってきたのは、小雪の舞う中、人々が年末の準備に追われている時だった。

「姫様に、一晚の宿をお願いできませんでしょうか？」

やってきたのは白い頭巾を目深に被った旅の巫女だという女と、そのお付きの男だった。巫女は頭巾から赤い唇と細い顎、そして艶やかな黒髪を覗かせている。おそらくまだ少女と呼べる年の頃だろう。男のほうは黒い紗で顔を隠している。細身の体つきと優雅な立ち居振る舞い、穏やかな声は、巫女のお付きとしてふさわしくもあり、頼りなくもある。

村の人々は作業の手を止めて、ある者は不審そうな、またある者は好奇に満ちた眼差しを彼らへ向けた。

うっすらと雪に覆われた畑の中に、ぼつりぼつりと建つ家の中で、ひときわ立派な建物から五十絡みの男が歩いてきた。若者に彼を呼びに行かせた老人に、村の地主であると紹介された男は、突然の客に迷惑そうに顔をしかめている。

「このような鄙びた村に、どうされました」「東京へ向かう途中でしたが、姫様がこの村から何者かに呼ばれたとおっしゃり、どうしても立ち寄りたいと」

「呼ばれた？」
眉を寄せた地主は、わざとらしく溜息をついた。

「隣の村まで行くには日が暮れましょう。仕方ありません。我が家へお通り下さい」

いかにも面倒臭いと言いたげな言葉にも、巫女は黙って頭を下げた。それを見守る村人たちが、申し訳なさそうに表情をくもらせた。先に早足で屋敷へ戻ってしまった地主の代わりに、数人の村人が巫女とお付きを案内す

「姫様が、池から声が聞こえるとおっしゃっています」

その言葉に、村人たちの肩がびくりと跳ねた。

「池から、声が？」

恐ろしげに繰り返し、村人同士で顔を見合わせる。

「まさか、地主様のお告げの『悪い妖怪』のことか？」

「悪い妖怪がいるのですか？」

「いえ、その、地主様が……」

言葉を濁した村人に、巫女はゆっくりと、だかはおっきり首を左右にふった。そして再び小声でささやく。

「姫様を呼び寄せた声のようです。これから儀式をして、声の主が何者なのか確認したいとおっしゃっていますが、どうされますか？」

巫女の提案に村人たちの表情が輝いた。

「願ってもないお申し出です」

ることになった。ぼつぼつと、村の状況や年明けに向けた準備のことなどを話しつつ、屋敷へ向かう途中で、巫女がふと足を止めた。そしてお付きの男の袖をつまんで引っぱる。「どうされましたか？」

彼女が頸を上げ視線を向けた先には池があった。茂る草に囲まれた池は、夕暮れ時にぼんやりと、水面に波紋を広げている。

「畑仕事のための溜め池でしょう」

「はい、そうです」

お付きの言葉に、村人の一人が応じた。頷いた巫女が、小声で何かささやく。お付きはあらためて池へ顔を向けた。

「声が？」

緩い風に吹かれて舞う小雪の奥に見える池は、ただそこにあるだけだ。その池をししばし眺めたお付きが、村人へ問いかける。

「ありがたいことでござえます」

村人たちが笑顔で頭をさげると、巫女も口元に笑みを描いた。

儀式は日が暮れてからということになった。不服そうな表情を浮かべた地主も同席し、すべての村人かと思われる人数が溜め池の周囲に集まった。周囲を照らすのは用意された一基の篝火だけだ。

池の前には小さな祭壇が作られ、村人から献上された餅や野菜が供えられた。

巫女が祭壇の前で五色の布がなびく鈴を鳴らすと、しゃんしゃんと涼やかな音が辺りに響いた。誰もが固唾を呑んで見守る中、鈴を置いた巫女が、お付きに差しだされた長い杖を受けとる。

小声で何か唱えながら、彼女は池の底へ杖を突き立て、暗い水を掻き混ぜ始めた。池の底から立ち上ったのは、なんとも不快な臭気だった。彼女の近くに立つ人の中には、顔をしかめて鼻から口元を押さえる人さえいた。しかし巫女も、そのお付きも、流れるような動きを止めることはない。

杖が何かに引つかかって止まったと同時に、大きなものが池に飛び込んだかのように、どぼんと水音が鳴った。

「な、なんだ!？」

「池の主でもおったのか!？」

「お告げの妖怪かもしれん!？」

年寄りには怯えたように池に向かつて手を合わせ、女たちは子どもたちを抱きかかえた。

お付きの男が巫女から杖を受けとる。

「何かあるようですね。引き上げるものはありませんか?」

男の頼みに、村人が数人進み出て、自分たちが池に入って引き上げると申し出た。

「あとこれは、小判です」

木彫りの籠に絡まっていた、網を被せた袋から出てきたのは、大量の小判だった。まるで龍がそれを腹に抱えていたようにも見え、人々が歓声を上げる。

「龍神様からの賜りものじゃ!」

「この池には龍神様がいらつしやった!」

私も我もと龍神を見ようと押し寄せる村人たちの間で地主が叫ぶ。

「待て! 違う! その小判はわしの……!」

だがその声に耳を貸す者は誰もいなかった。微笑む巫女が、お付きの袖をついと引く。

「龍神様は長くこの池にいらつしやり、皆さんを守っていたそうですが、この池が埋められると聞いて、余所へ移ろうとされているそうです」

巫女の言葉を代弁したお付きに村人たちが詰め寄る。

「それはいかん!」

彼らが池に入るのを見て慌てたのは地主だ。顔色をなくして呆然としていた彼が、慌てたように巫女の足下へ転がり出る。

村の若者が水の中から何かを持ち上げた。黒い固まりにしか見えないそれを、篝火の明かりの近くまで運ぶ。

「待て! 待てそれは……!」

飛び出した地主が奪おうとしたが、それは巫女のお付きの手に渡り、炎の明かりに照らされた。

それは……。

「龍、ですぬね」

それは二尺(約60cm)ほどの木彫りの龍だった。いつから沈んでいたものか、すっかり黒ずんではいたが、龍に間違いなかった。

「龍神様が出て来たぞ!」

「なんとか、ここに留まって下さらんか」

「池のほとりに祠を作って祀れば、この村に留まって下さるそうです」

その言葉に、木彫りの龍を困んだ人々は小躍りして喜んだ。

「祠じゃ! 祠を作るぞ!」

「金を賜ったのだ。立派な祠を作れるぞ」

そう盛りあがっていた一人が、はつとして地主へ目を向けた。

「龍神様を追い出すわけにはいかんでしよう?」

「そうだ、地主様。この池は潰さねえでください」

「龍神様のために」

「罰が当たっては恐ろしい」

村人たちの懇願の中にまぎれた言葉を、地主は聞き逃さなかった。

「罰……」

青ざめてつぶやいた彼は、ぎこちなく頷く。

「そ、そうだな。罰が当たるのは……困るな。池はこのままにして、龍神様に村をお守りいただこう」

溜め池を埋めることを諦めた地主に、村人たちは諸手を挙げて喜んだ。そして巫女とお付きを騒ぎの輪に加える。

「さあ、さあ、姫様。一緒に祝いましょう」
「今夜は龍神様が見つかった祝いの宴じゃ！」

そして村人たちは家々から酒やつまみを持ち寄って、夜が更けるまで木彫りの龍を囲んで宴を続けたのだった。

そして翌朝、地主の屋敷に一晚泊まった巫女とお付きの二人は、大勢の村人たちに笑顔で見送られながら村を発っていた。

それから半時ほど後、隣村の外れにある人気がない神社の前で洋装の青年と合流した巫女——香澄は、ほうと息を吐いて頭巾を外した。謎めいた巫女の雰囲気壊さぬよう、声

「香澄さん、久馬さんは大根なんですから許してあげて下さい」
「そうでしたね……」

話によると、彼は大根役者なのだそうだ。人には向き不向きがある。

香澄は社の中に入ると、羽織っていた巫女装束から着替え、下ろしていた髪をまとめながら外にいる久馬に問いかける。

「久馬さんの投げ込んだ石について誰も訊いこなかったのは、どうしてでしょうか」

あの音が大きなフナだったのかそれとも他の何かだったのか、気にした人がいなかったのが不思議だった。

「知りたくなかったのさ。悪い妖怪なんてものがいるなんてことを巫女に認めて欲しくなかったんだろ。龍神が守ってくれると言っているのだから、それでいいじゃないかって」

「魚でも妖怪でもなんでもいいんですよ。あの時、何かが池にいた——ような気がする、というのが大事なんです」

を出さずに一晚過ごしたのだが、これが思った以上に苦行だったのだ。

「あーもう。やっとしゃべっていいんですね？」

「いやあ、香澄さん。見事な演技でした。さすがが肝が据わってらっしゃる」

「私は黙って艶煙さんの言うとおりにしましただけですよ」

黒い面紗を外したお付き——艶煙から、何をするでもなく神社で一人待っていた久馬へ香澄は目を向けた。

「久馬さんだけ、衆をしすぎじゃないですか？」

「そんなことあるか。村を調べに行った艶煙から話を聞いて、今回の筋書きを書いたうえに、木彫りの龍を用意して沈めて、池に石を投げ込んでやっただろうが」

久馬が人を騙すために演技をすることはあまりない。いつも筋書きを考えるのは彼で、演じるのは艶煙や香澄なのだ。

「人心を操るには恐怖がものを言うのさ」

昨夜久馬は石を投げただけだったが、村の人たちを驚かせるだけではなく、ちゃんと意味のある行動だったようだ。

おかげで池が埋められることはなくなり、香澄は今後も美味しい蕪を食べることができそうだった。

でも。
「溜め池が埋められなくなったのはいいですけど、地主さんはちよっと可哀想でしたね」

「そうか？」

艶煙が調べたところによると、村の地主は、徳川の御代には羽振りがよく、それを自慢していたらしい。だが戊辰の戦が始まると、びたりと金の話をやめてしまった。財産を守るために金を隠したのだろうともしばらの噂だったらしい。

そして池を怪しんだ艶煙が探した結果、水底から金が見つかった。

おそらくは取り出せないままに時が経ってしまい、なんとか村人にばれないように探し出そうとして考えたのが『お告げ』だったのだらう——というのが、久馬と艶煙が出した結論だった。

実際のところ、「池を埋める」というのが金を探すためだったのかも、本気で埋めるつもりだったのかも分からない。でももし金を探すためだったのであれば、池の掃除がてら探せばよかったものを、誰にも知られずに手元に取り戻そうとした結果、香澄たちが首を突っ込むことになり、金は『龍神の社』に変化してしまったということだ。

欲は出すものではない。
久馬が煙草の煙を吐きながら、くくつと喉を震わせる。

「まあ、『龍神現る』ってな記事でも書いてやれば、物見高い江戸っ子は、こぞって祠を

見に出かけるだろ。茶でも出して金をとれば、地主サ、マも儲かるんじゃないか？」

「なるほど？」

失った金を取り戻せるかどうかは、地主の腕にかかっているようだった。

もしかしたら、それほど痛手にはならないかもしれない。溜め池も埋められず、地主も損をせず、丸く収まってくれることを香澄は祈った。

それから数日後、日陽新聞の隅に見事な龍神の画までついた記事がひとつ。

——池より現れ出でたる龍神。池に棲む悪しき妖怪を封じる為、祠を建てよと宣い、村人へ金子を与えたと云ふ。村人は池を龍神の池と崇め、村のみならず、参詣者すべての守り神として奉るとぞ。